楽天銀行株式会社
2026 年 3 月期 第 2 四半期（中間期）決算説明会 質疑応答
（2025 年 11 月 11 日）

Q01. ボーナス金利プログラムの手応えと評価について、第 1 四半期決算説明会の際に、ボーナス金利プログラムで預金 2 桁増を目指すとしていたが、今回、預金残高は前年同期比（YoY）10%増となった。この手応えと評価はどうか。また、適用顧客の属性に特徴は見られるか。主に楽天グループ内からの顧客獲得なのか、あるいは楽天グループ外からも顧客獲得があるのか、教えてほしい。

A01. ボーナス金利プログラムの手応えについては、当初想定よりも認知度を上げるための努力が必要であると考えている。この施策をファインチューンしていく必要があるかについては、もう少し見極める必要がある。しかし、ボーナス金利プログラムの適用を受けている顧客を見ると、預金残高が増加傾向にあるため、顧客の動きからは当初期待していた効果はあると評価している。ただし、もう少し時間をかけて吟味することや、場合によっては他の取組を行うことも検討したい。また、適用顧客の属性分析については、まだ詳細な分析が必要であり、追加施策を検討する中でさらに分析を深めていく段階である。

Q02. 金利収支と非金利収支それぞれの計画対比での進捗評価はどうか。また、通期計画の上方修正の余地について、日銀の利上げ動向を踏まえ、第 3 四半期決算等で判断する方向性でよいのかを確認したい。また、新中期経営計画の発表タイミングについて、具体的なタイムラインがあれば教えてほしい。

A02. 業績の進捗については、全体感としてはオントラックであり、現時点では業績予想の見直しが必要な水準ではないと考えている。当行自身の評価としては、預金残高についてはもう少し伸ばしたかったという思いがあり、結果として、トップラインは利益に比べてやや弱めに進捗している。一方で、ミドルリスクアセットと呼んでいる資産は計画を上回る進捗であったため、トップラインの伸びに比べて利益の指標は良好であったと評価している。役務取引等収支についてはもう少し伸ばしたいと考えているが、特殊要因を除けばまずまずの数字であるものの、もう少し頑張れたはずだという評価である。新中期経営計画については、人材育成も兼ねて幅広い従業員に参加してもらいながら現在検討中であり、公表できるタイミングとしては下期の比較的遅いタイミングになる見込みである。

Q03. JR 東日本との連携について、JR 東日本が M&A 予算で 2.6 兆円を計上し、フィンテック分野等も検討しているという話があったが、楽天銀行として JR 東日本とさらなる共同の余地を検討していることはあるか。

A03. JR 東日本との連携については、現在取り組んでいるものについては非常にうまく行っていると認識している。引き続き、水面下では様々なコミュニケーションを行っているが、現時点で公表できるような段階のものはない。

Q04. 預金全体の考え方について、ボーナス金利プログラムは、7 月、8 月は YoY の伸長に貢献している

ように見える。ボーナス金利プログラムに限らず、預金全体の考え方として現在どのような状況にあるのか教えてほしい。

A04．預金についての評価としては、前四半期末の時点に比べて足元は改善してきていると認識している。特に、1 口座当たりの預金残高が増加傾向にある点がポジティブに評価できる。7 月、8 月と比べて 9 月の数字を見ると、スライド 6 にもある通り、9 月末をもってふるさと納税の制度が変更になったことで、世の中的には駆け込み需要があったと考えており、その影響で口座からの出金が多かったと分析している。

Q05.　アセット（貸出金・買入金銭債権）拡大戦略について、具体的にどのようなアセットに期待しているか。また、今後さらに加速させるようなドライバーを見込んでいるかについて、教えてほしい。

A05.　預貸率は改善していくと考えている。まず個人向け貸出金については、これまで通り着実に積み上げていきたい。当行の運用資産の特性である、一つ一つは小さいが大数の法則が効くような運用資産を着実に積み上げていくこと、そして ABL 等の証券化を通じた運用資産の拡大を進めていきたい。証券化アセットについては、引き続き不動産等を中心に様々な裏付け資産のパイプラインがあるため、これを着実に刈り取っていくことで運用資産の拡大を目指す。

Q06．みずほフィナンシャルグループとの取り組みとして、今後のアセットの積み上げ、加速、あるいは他の分野での協業はあるか。

A06．資産運用においては、色々な方と取引をしており、その中で、みずほ FG ともコミュニケーションはさせていただいている。兄弟会社では資本関係はあるが、当行とは無いといった状況に変わりはないが、お互いにメリットがあるような関係を築けないかということで、当然ビジネスベースでの話はさせていただいている。

Q07．ボーナス金利プログラムの認知度向上のためのプロモーション等を検討しているとのことだが、今後、このプロモーションコストはどの程度になるかを教えてほしい。

A07.　ボーナス金利プログラムについては、顧客への認知度が十分に高まっていないことが課題であると認識している。そのため、様々な WEB 上の露出面をこれまで以上に積極的に活用していくことを中心に考えている。これまでの競争環境を考慮し、マーケティングコストに大きなウェイトを置かずにきたが、今後は新しい環境下で積極的にアクセルを踏み込んでいきたいと考えている。ただし、ここでは数値的な情報は差し控えさせていただく。

Q08.　スライド 17 の金利感応度について、試算を見ると調達金利の追随率が 50%となっている。今後、追加利上げがあった場合、預金追随率は 50%程度を想定しているのか。また、日銀による貸出増加支援基金の制度終了の影響が限定的という点は、バランスシートの拡大を見込んでいるという理解でよいか。

A08.　今後の金利感応度、預金金利の追随率についてだが、基本的には従来のベースレートは 40%というものが、他行でも様々なプロモーションが行われているため、預金追随率は実質的に 50%水準も見えており、場合によっては 50%を超える局面もあるのではないかと考えている。日銀からの借用金の件だが、現在の残高

2.9 兆円が 2028 年 3 月末で制度上ゼロにならざるを得ない。この返済ペースを上回るレベルで預金を積み上げていきたいと考えており、それをイメージ的にスライド 17 で図示している。費用サイドの上限幅が少ないのは、借用金の額面に対して調達金利が僅少であるため小さくなっている。

Q09. スライド 17 の金利感応度について、日銀から 2.9 兆円の借用金を固定で借りていて、2.8 兆円分を日銀預け金として置いていると理解している。その 2.9 兆円分の負債側と資産側のイメージとしては、2.9 兆円に 25bp をかけて 75 億円くらい減るため、金利感応度の 135 億円という試算が概ね半分くらいになるという理解で差し支えないか。

A09 考え方のロジックとしては、ご理解の通りになるだろう。

Q10. ふるさと納税の駆け込み需要により 9 月末は預金が減ったという話だったが、10 月末の預金の月次数字を見れば、その一時的要因は払拭されているとみてよいか。

A10. ふるさと納税については、9 月末に駆け込み需要があったと認識しているが、実際の資金決済には通常タイムラグを伴うことがあるため、10 月の預金の動きにも影響は出ると考えている。

Q11. AI 戦略の差別化と取組の進捗について、楽天グループが持つ AI の業務オペレーションの効率化がメインになると思うが、どのような進捗が見られているか。来期に向けて、あるいは中長期的に向けて、楽天銀行ならではの AI 戦略の差別化について説明してほしい。

A11. AI の活用推進については、楽天グループ全体でも AI の活用促進のために様々な事業が参加するコンテストをグループ内で開催している。楽天銀行もその中で AI を活用したコンシェルジュのプロトタイプを作成・稼働させるなど、実験段階が様々な方面で進みつつある。一方で、AI を活用する際にいかにコスト効率を良くするかが重要であり、これまで非常にクローズドなシステム運営を行ってきたが、グループのリソースを活用することを前提に高効率化を狙う局面にある。

Q12. BaaS プラットフォームについて、引き合いの状況、それから将来的に BaaS 事業がもたらす財務貢献目標などがあれば教えてほしい。

A12. BaaS については、いくつか潜在的にお話しさせていただいている先はあるが、いつどのような形で発表できるかがなかなか読みにくい状況である。そのため、現時点では年度の事業計画等のレベルでは数値を織り込んでいない状況である。

Q13. 資金運用利回りに関して、貸出金利回りと買入金銭債権利回りの四半期ごとの数字がおおむね横ばい圏内となっている。これは、楽天銀行が金利上昇影響を取り込むのが早いため、四半期ごとにほぼ横ばいで推移しているのが全体像と見て良いか。

A13. ご認識の通りである。運用利回りについては、第 1 四半期と第 2 四半期でほぼ横ばいであるのは、当行の資産特性が変動金利かつ Tibor 連動であり、すぐに政策金利引き上げの効果が出ることを反映した結果である。

Q14. 預金利回りに関して、四半期ごとにボーナス金利プログラムの導入後、2bps 程度の上昇にとどまっている。本来であればもっと高い水準を見込んでおり、顧客認知度が足りないためプロモーションを打っていくという理解で良いか。

A14. ご認識の通りである。預金の調達金利についても、もう少し速いペースでボーナス金利プログラムが浸透すると考えていたが、2bps ほどの押し上げ効果にとどまっている。もう少し上がると想定してプログラム運用をしてきたが、今後これをさらに推進していきたい。

Q15. BaaS 関連および JR 東日本関連について、日本経済新聞の記事で QR コード決済を導入されるという話があった。これは楽天銀行にどのようなインパクトをもたらすか、またいつ頃と見ているか教えてほしい。

A15. QR コード決済を導入されると伺っているが、実際にまだ計画として数字には織り込んでいない。しかし、JR 東日本の方でこれが普及すれば、当行にとっては手数料が増える機会になると考えている。

Q16. 日銀借用金について、現状の利回りとしてはどれくらいになっているか。

A16. 借入のタイミングによって金利は変わってくるが、古くからスタートしたものについては、金利がゼロとなっている。

以 上